

2015年11月23日

自治労福島県本部青年部

副部長 佐々木 佑

○11・23幌延デー北海道青年女性学習会 講演次第

1. 現在の福島避難状況（別紙1～2）
2. 県内の状況（別紙3、他）
3. 県内の自治体職場で働く仲間の実態と声（別紙4～5）
4. 最後に

平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第1539報）

平成27年10月21日（水）8時00分現在
福島県災害対策本部

1 警報等発表状況

平成23年3月11日	14:46	震度6強：白河市、須賀川市、国見町、天栄村、富岡町、大熊町、浪江町、鏡石町、楢葉町、双葉町、新地町 震度6弱：福島市、二本松市、本宮市、郡山市、桑折町、川俣町、西郷村、矢吹町、中島村、玉川村、小野町、棚倉町、伊達市、広野町、浅川町、田村市、いわき市、川内村、飯館村、相馬市、南相馬市、猪苗代町 震度5強：大玉村、泉崎村、矢祭町、平田村、石川町、三春町、葛尾村、古殿町、会津若松市、会津坂下町、喜多方市、湯川村、会津美里町、磐梯町 その他県内で震度5弱～を観測
	14:49	津波警報(大津波)発表
	17:40	震度5強：富岡町 その他県内で震度5弱～を観測
3月12日	20:20	津波警報(津波)へ切り替え
3月13日	7:30	津波注意報へ切り替え
	17:58	津波注意報解除
3月23日	7:12	震度5強：いわき市 その他県内で震度4～を観測
3月23日	7:34	震度5強：いわき市 その他県内で震度4～を観測
3月23日	18:55	震度5強：いわき市 その他県内で震度4～を観測
4月7日	23:32	震度5強：桑折町、国見町、田村市、伊達市、相馬市、新地町、飯館村、南相馬市 その他県内で震度5弱～を観測
4月11日	17:16	震度6弱：中島村、古殿町、いわき市 震度5強：白河市、鏡石町、天栄村、棚倉町、平田村、浅川町 その他県内で震度5弱～を観測
	17:18	津波注意報発表
	18:05	津波注意報解除
4月12日	14:07	震度6弱：いわき市 震度5強：浅川町、古殿町 その他県内で震度5弱～を観測
7月31日	3:53	震度5強：楢葉町、川内村 その他県内で震度5弱～を観測
9月29日	19:05	震度5強：いわき市
平成25年9月20日	2:25	震度5強：いわき市 震度5弱：広野町、楢葉町 その他県内で震度4～を観測

2 県・市町村の体制(災害対策本部等設置状況) ※詳細別紙(P.2)

- (1) 県 3月11日 災害対策本部設置、警察本部災害警備本部設置
(2) 市町村 災害対策本部設置:44市町村

3 避難の状況

県内への避難者数（10月16日 現在）	61,161 人	※詳細別紙(P.6)
県外への避難者数（9月10日 現在）	44,387 人	※詳細別紙(P.7)
避難先不明者	31 人	※詳細別紙(P.3)
合計	105,579 人	

4 被害の状況

(1) 人的被害 ※詳細別紙(P.4)

・死者	3,802 人	(南相馬市 1,114 人、相馬市 486 人、いわき市 460 人、浪江町 556 人、富岡町 344 人ほか)
・行方不明者	3 人	(広野町 1 人ほか)
・重傷者	20 人	(相馬市 4 人、いわき市 3 人ほか)
・軽傷者	163 人	(南相馬市 57 人、国見町 20 人ほか)

(2) 住家・非住家被害 ※詳細別紙(P.5)

住家

・全壊	15,140 棟
・半壊	78,361 棟
・一部破損	141,341 棟
・床上浸水	1,061 棟
・床下浸水	351 棟

非住家

・公共建物	964 棟
・その他	36,492 棟

5 消防職員の出勤延人数

・消防職員	5,706 人
・消防団員	43,776 人

6 その他

(1) 鉄道

・常磐線	竜田～原ノ町間、相馬～浜吉田間 運転見合わせ
------	------------------------

(2) 一般道路 ※詳細別紙(P.8,9)

・主要国道	国道6号 全線通行可(帰還困難区域内は、自動二輪、原動機付自転車、軽車両及び歩行者は通行不可)
・一般国道	平成24年6月8日付けで全線通行可
・県道	大芦鹿島線など12箇所まで通行止め
・農林道	

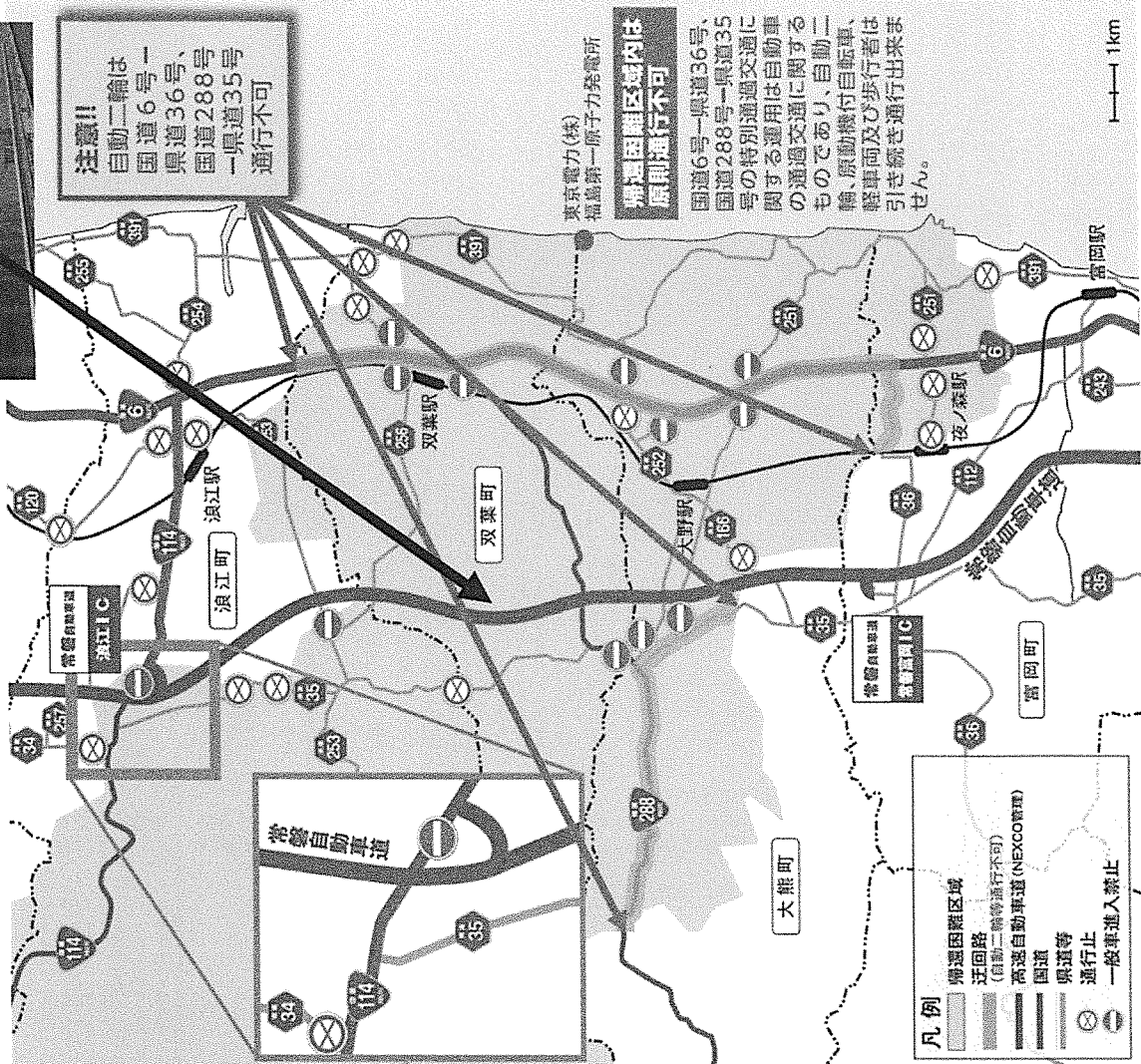
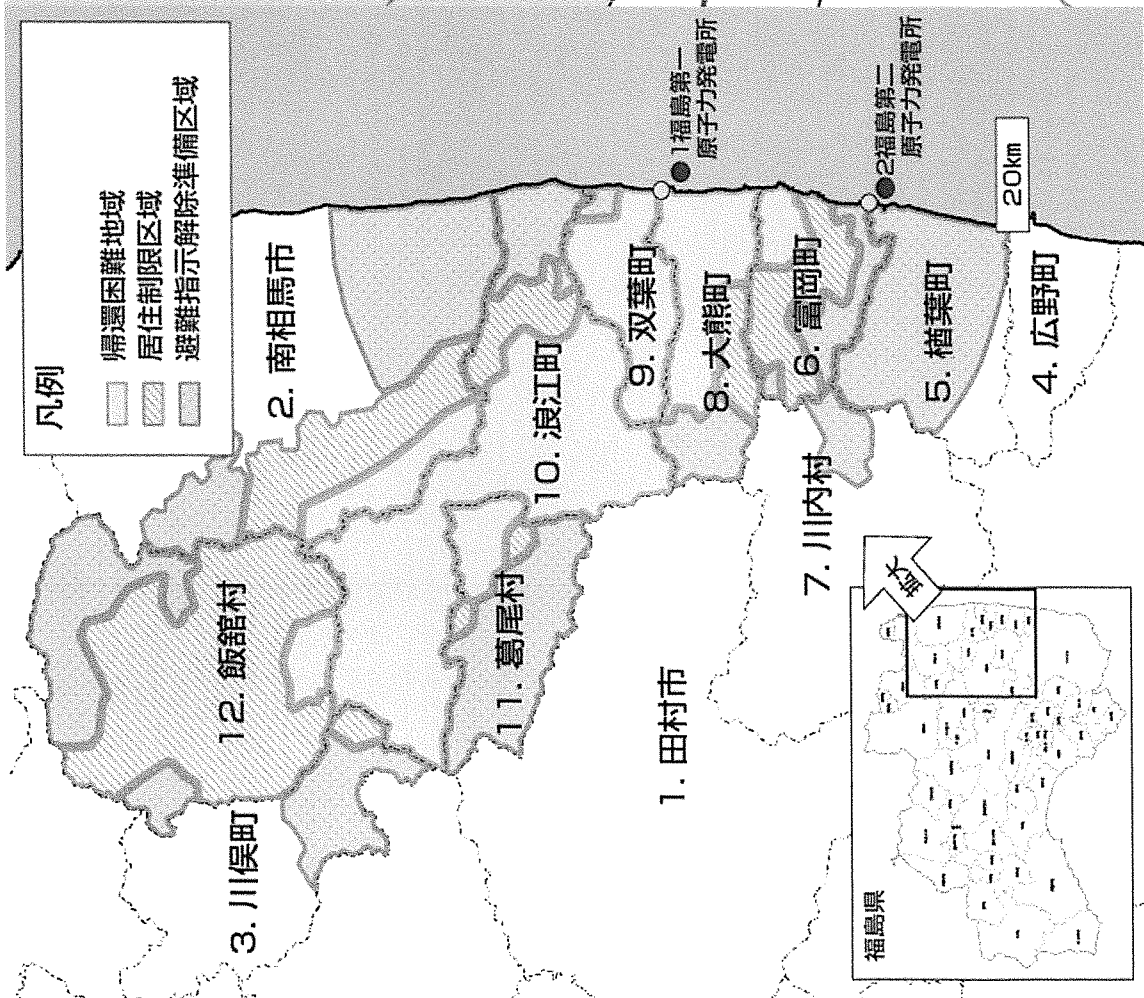
(3) 高速道路

平成26年2月22日付けで全線通行可

(4) その他

・停電	浜通りの一部(帰還困難区域)で12,631戸
・NTT回線	避難指示区域で11,300回線不通 ※特設公衆電話(無料)については平成24年3月27日に撤去
・水道	津波被害地域、帰還困難区域など18,358戸で断水

別紙2 現在の避難区域の状況について



【3.11】「避難者、帰れ」落書きから2年（一部抜粋）

投稿日: 2015年03月10日 17時26分 JST 更新: 2015年03月11日 13時16分 JST

「避難者、帰れ」。東日本大震災から1年半経った2012年12月、福島県いわき市役所の玄関でショッキングな落書きが見つかった。福島第一原子力発電所から約30km南に位置するこの街には、事故による避難者を含めた約2万4000人が避難。賠償金格差などが原因で避難者と地元住民との間に軋轢が生まれ、避難者の自動車が何者かによって破壊されるなどの問題が、センセーショナルに報じられた。

あれからさらに2年3カ月。震災から4年が経過した今、地元住民の中から、原発避難者に対する理解をうながす取り組みが生まれているという。いわき青年会議所(JC)のメンバーに、1月下旬、話を聞いた。

■表には出なくなった。しかし、根は深い」

震災直後、いわき市では、原発被災地からの避難者が集中、交通渋滞が起こったり、医療機関が混雑したりしたため、いわき市住民から不満が出た。

さらに双葉郡住民といわき市住民には賠償や待遇に違いがあったこともあり、避難者に対する偏見も発生。「避難者は賠償金をパチンコに使っている」「賠償金で高級車を乗り回している」などと言う人がいることも報じられた。

しかし、それも今は報道されることもなくなった。

「車が傷つけられるなどの報道があったときに比べると、今は(避難者に対するパッシングも)落ち着いてきています。表立っての問題はないんです。しかし、問題はより内在化してきていると思います」。

そう話すのは、いわき市に住む会社員、野木和洋さん(39)。いわきJCで2014年、住民と避難者の相互理解を促すことを目的とする「心の復興推進委員会」委員長を務めた人物だ。

確かに大きく報道されることはなくなった。それでも、双葉での生活を諦め、いわき市で生活を再建するために家を建てた避難者に対し、「ああ、あの人は賠償金をもらっているからね」と話す人や、旅行に行った避難者に「高速、無料だもんね」と言う人は、いまだに多くいるという。

問題は「より根深くなり、心の問題になってきている」と野木さんは述べた。

2015年のいわきJC理事長を務める赤津慎太郎さん(35)は、自身が経営する保育園の例を紹介した。

「2014年に採用した職員の一人は、仕事でのミスを『避難者だから』と言われたことが原因で、前の職場を辞めてきました。全く違うところですよ。避難と仕事は関係ないのにそういう方向に勝手に持って行かれる。実際にそういう目にあつた職員の話を知ると、悲しくなります」

2014年2月

自治労福島県本部青年部・女性部

原発立地町村（大熊町）で働くの女性職員の現状報告

1. 初めに

2011年3月に発生した、福島第一原子力発電所の事故以降、当該原発を抱える福島県の沿岸部の単組で構成する「浜総支部」青年部・女性部は、自治体ごと避難している単組も多く、活動休止状態だった。しかし、県本部のオルグ等を通じて、「活動を再開したが、何をやっていいかわからない」、「他の浜の単組の状況をしりたい」、「同じ浜の仲間と交流したい」といった声が多く出されたため、去る2014年2月9日に、「浜総支部青年・女性交流集会」を開催し、震災後初めて浜総支部青年・女性が集まり、分散会等を通じて、お互いの現状を報告しあった。また、浜の仲間の実態を知りたいという県内の青年・女性部員も分散会に参加した。

以下は、その分散会で出された、大熊町の仲間の話を抜粋したもの。

2. 大熊町の現状

原発事故以降、町ごと避難を余儀なくされている大熊町は、現在、福島県内の会津若松市を拠点とし、同じ県内の二本松市、いわき市に主張所を設けている。

特にいわき市は、大熊町と同じ浜通り地方にあり、放射線量も低く、気候も温暖であるため、多くの町民がいわき市に移っている。しかし、一部で受入れ側であるいわき市民と避難者である大熊を含む双葉地方の住民との間でトラブルも発生している。

大熊町の職員は、約120人（うち女性約40人）ほど。早期退職者も多く、去年は6人（若手2人、中堅2人、管理職2人）が退職した。新規採用者も採用しているが、それでも慢性的な人員不足状態である。また、同じ大熊町の職場の中でも、業務量の格差が問題となっており、一部の職員に業務が集中するなど、業務量のアンバランスさもストレスの一因になっている。

そのような状況の中、避難区域が3つに再編され、許可証があれば立ち入りができる地区が出来、大河原という地区を拠点に業務を再開しようとしているが、その地区の罹災証明発行業務なども発生し、会津から片道2時間を通わなければならないなど、業務量も増えている。

3. 分散会に参加した若手女性組合員の実態

防災関係・放射能対策の職場で勤務をしている。

原発事故前は保育士の仕事をしていた。しかし、町ごと会津を始め県内数カ所に避難し

ているため、保育所自体が無く、子供の一時預かり等はやっていても、子供の数が少ないので、若い順から任用替えとなり、事務職となった仲間が何人もいる。できれば保育士の仕事に戻りたいという仲間もいる。

逆に、いわき市に大熊町の住民が多く避難している分、子供たちも大勢避難しているので、いわき市の保育士の仲間は大変だと思う。

自分は、もともと臨時保育士を経て正規保育士になったが、正規職員はやりづらい。責任の重さが違う。

そんな中、震災・原発事故が起こり、保育所勤務から避難所勤務になった。子供ではなく、大人と接するのが慣れないので大変だったが、それは今でも変わらない。

避難所のコールセンターに配属になり、土日休日・夜間関係なく、交代で働いた。町民から「家に帰れない、どうしてくれんだ」という憤りをぶつけられたが、とにかく聞くしかできなかった。ちなみに、震災当時の超過勤務手当は、月額 30,000 円が上限で、あとは代休扱いとなった。

コールセンターの業務が落ち着いたので、現在の職場に異動したが、すでに業務が溜まっていた。日直業務もあるが、どんな相談が来るかもわからない中、マニュアルを見てもよく分からない。防災関係の担当は土日も休みもない。休職している仲間もいる。

慢性的な人手不足や、頻繁な人事異動、公私のストレスなどから、他の職場でも、早期退職者が多いと聞いている。

自分も、日常業務は何とか回せるようになったが、大変な状況には変わりがなく、いつまで続けられるか不安を感じる。先が見えないし、町自体がどうなるかも分からない。線量も低く、故郷にも近いいわき市に家族で行きたいと思うが・・・。

今自身だが、結婚して子供が出来たとしたら、大熊町に帰りたいと思うが、帰れないだろうと思う。

そんな状況の中、単組女性部の活動が再開し、学習会なども行ったが、もっと早くやればよかったと思うこともある。みんな「自分の課が一番大変だ」と思っているが、それはどういうことなのか。他の仲間の状況に気を配っていない。

4. 最後に

今回のような実態は、各分会でも出されたが、同じ福島県内で働く仲間さえ、初めて聞く内容が多かった。それだけ、同じ県内のことでさえ実態が交流できていない、あるいは「他人事」と思っている仲間も多いあらわれである。学習・交流の機会を作ったり、オルグなどで実態をつかむなど、県外に発信することも重要だが、まずは、県内で働く青年・女性部の仲間自身同士、「県内の仲間の現状や思い」、そして、「なぜ反核の運動に取り組むのか」を共有していきたいと思う。

2015年11月19日

○ 福島県本部浜総支部青年部・女性部 確定期単組オルグ レポート

※ 避難している自治体をオルグした際に聞いた、特徴的な実態をまとめたもの。

1. 職場などの問題について

- ・ 震災後に採用された職員の中には、町「以外」の出身もいる。
町民から、震災前の話をされたり、問い合わせや苦情を言われても、そもそも「震災前の町の状況」がわからないし、震災前からいる同僚と「温度差・溝」を感じてしまう。
- ・ もし帰れるようになったとしても、放射線量などの不安から、帰りたいとは思えない。
- ・ 保育士として採用されたはずなのに、保育所がないため、現在は任用替えとなり、行政職として秘書広報課にいる。
- ・ 別な単組でも、保育士として採用されたのに、配属となったのが多忙な「除染」関係の部署であり、現在もメンタルで休んでいる。
- ・ 復興庁から支援員が派遣されているが、復興庁が雇用した職員であり、中には「天下り」「退職者」もいて、「色々口を出して職場を引っ掻き回すので、全然仕事が進まない」、「住民とトラブルを起こす」、「埋蔵文化財を「ガラクタ」と言ってフェイスブックに乗せ、機密情報も写真に写っていて問題になった」など、支援どころか逆に仕事を増やしている事例も多い。
- ・ 多自治体からの応援職員は意欲もあり、仕事もすごいやってくれるので、とても感謝している。
- ・ 復興関係部署の1つの係で、町の予算の半分以上、200億円の業務がある。
- ・ 国から多額の様々な交付金が降りてきているが、職員数が全然足りず、担当職員にかなりのしわ寄せ。また、早期退職者の仕事を補うため、臨時非常勤の職員にもかなりの負担がかかっている。
- ・

2. 避難指示が解除されたが・・・

- ・ 町民に帰還を促しているが、一向に進まない。
- ・ 先月避難指示が解除された檜葉町でも、町民7,000人のうち、実際に帰っているのは100人程度。買い物する場所はコンビニがメインだし、病院も診療所が再開しているが、処方箋が出せないのも、隣町で薬をもらわなくてはいけない。
- ・ 議会から言われている町長から、「職員も町に住め」とかなり厳しく言われるが、「治安が不安」、「生活に不便すぎる」、「子供たちが避難先の学校に通っている」等々

の理由から、1時間30分かけて、避難先から通勤している。

- ・ 治安面の不安から、警察だけでなく、町が委託して24時間町内巡視をしている。
- ・ 帰ってきた町民の安否確認のため、日中は職員が、夜間は管理職が定期的に巡回している。
- ・ 「職員はなんで町に住まないんだ」など、復興関係で苦情の電話がくることもあるが、報道などを見た「多自治体や首都圏のクレーマー」も多い（お前ら関係ないだろと・・・）。
- ・ 「人のいない町」、「道路わきに並んでいる、除染廃棄物の入った大量のフレコンバック」が、もう当たり前になっている。

3. その他

- ・ 新規採用がほとんどなく、青年部員の定年を39歳まで延長したが、それでも、部員11人中20代が3人。部員のほとんどが震災後の採用で、「組合」「青年部運動」を理解していない。
- ・ 前年度まで、通勤手当が2分の1にカットされていたが、ようやく全額支給となった。しかし、町内出張旅費はいまだに支給されない。
- ・

大熊町視察及び現地学習会

報告書



2015年1月30日（金）

自治労福島県本部 青年部有志

まとめ：青年部事務局長 愛場（大熊町職労）

～視察コース～

- ①熊川海水浴場 → ②（財）栽培漁業協会 → ③大野駅 → ④福島県オフサイトセンター
⑤（現地連絡事務所にて）現地学習会

大熊町視察場所



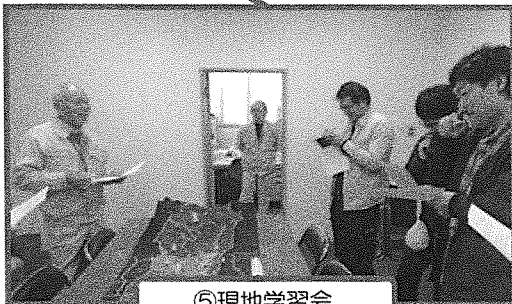
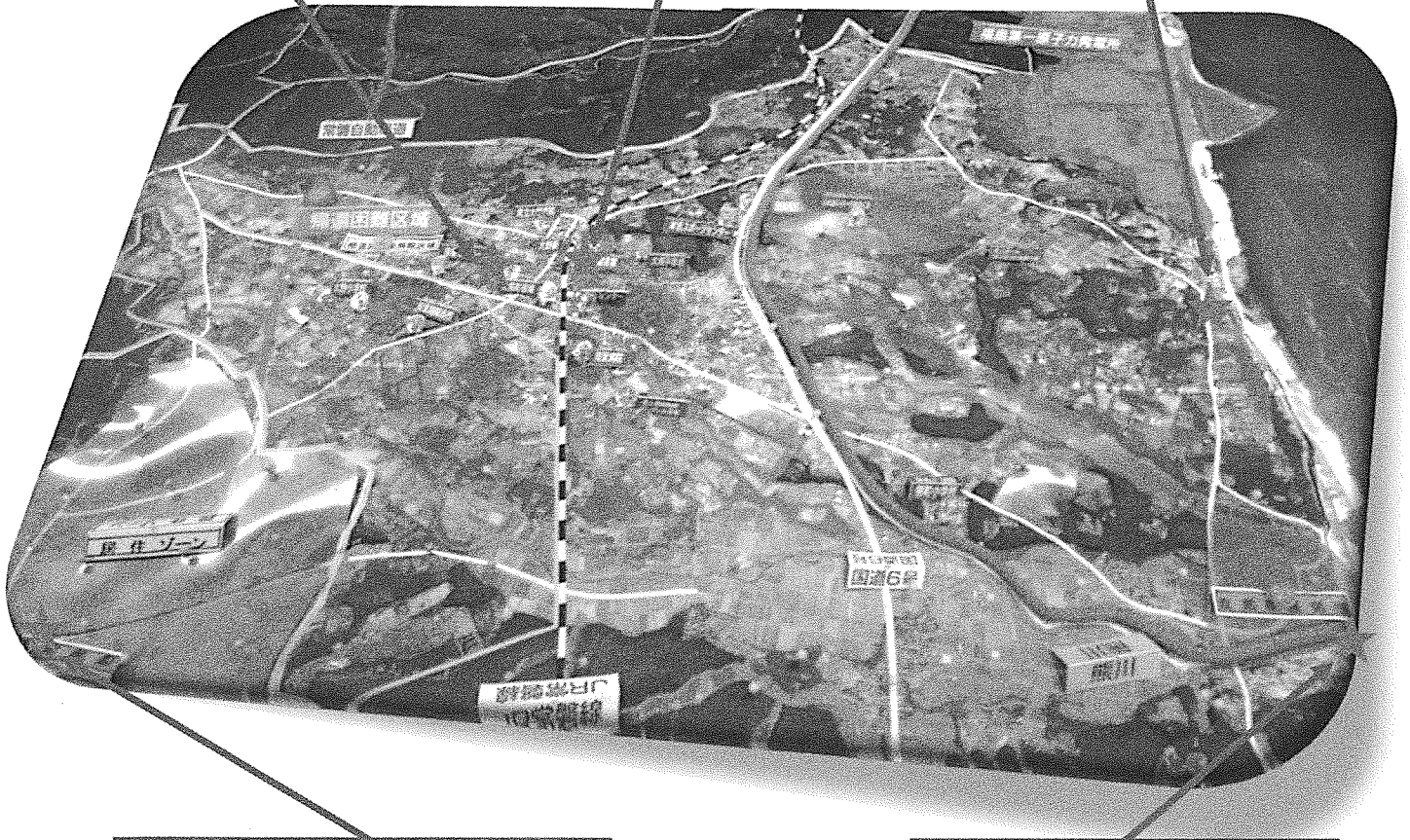
④福島県オフサイトセンター



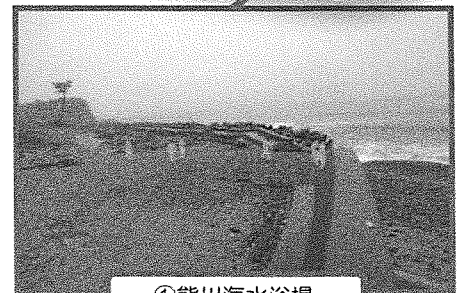
③大野駅



②(財)栽培漁業協会



⑤現地学習会



①熊川海水浴場

①熊川海水浴場

この熊川海水浴場は、鮭のやな場としても有名な熊川に面しており、夏には多くの観光客で賑わいを見せている場所であったが、津波によって海岸の防波堤は破壊され、今もそのままの状態が残っていた。また、自衛隊によって整理された津波がれきが山積みになっていた。

そのような中、地震によって海岸内に出来た池には、白鳥が飛来しており、現地学習会にてその話をすると、現地連絡事務所の職員が餌付けをして、自然保護区となった熊川地区を野鳥の楽園にしたいとの事であった。



②(財)栽培漁業協会

県の水産種苗研究所に隣接し、限りある水産資源の培養と有効利用を目的とし、さまざまな海洋生物の養殖等の研究をしていた。その栽培ドームが屋根柱のみで空洞になっている光景を目の当たりにして、改めて津波の恐ろしさを感じた。

③大野駅

JR常磐線の大野駅は、震災前は通学する学生や通勤するサラリーマンで賑わい、特急スーパーひたちで仙台や東京にも行ける、大熊町民にとってなくてはならないものであった。

現在は、屋根は崩れ落ち、構内には獣のフンや足跡があちこちにある状態で、人がいないとこうも変わってしまうのかと驚いてしまった。



④福島県原子力災害対策センター（オフサイトセンター）

原子力災害が発生した際に、官邸と関係機関がテレビ会議で対応を協議するための施設がオフサイトセンターである。

しかし、震災当時は停電によってまったく機能せず、意味をなさなかったという事である。

このオフサイトセンターが機能し、福島第一原発の状況が官邸と関係機関で情報共有出来ていれば、事故は防げていたかもしれない。

⑤現地学習会

現地連絡事務所職員の方から、震災時の対応について話を聞き、緊急時に自分が何をすべきかを学ばせてもらった。

また、大熊町の復興のため、前向きに仕事をしている姿に励まされた。

大熊町の復興のため、そして、原発事故を風化させないため、県内外の仲間に大熊町の現状を発信していきたい。

(詳しくは次ページ以降のとおり)



～ 現地学習会記録 ～

1. 参加者

現地事務所職員：横山 常光（元復興事業課長）
加井 孝之（元福島県国土調査測量協会職員）

県本部青年部有志：部長 中村 洋介（二本松市）
副部長 佐々木 佑（福島県国民健康保険団体連合会）
事務局次長 佐藤 貴史（伊達市）
常任委員 平林 雄太（福島県土地改良事業団体連合会）
常任委員 加藤 和明（伊達市）
前事務局次長 二階堂 晃平（伊達市）
事務局長 愛場 学（大熊町）～引率～

2. 横山さんからのおはなし

(1) 避難時の対応等について

原発事故による避難が始まってからは、指示系統が機能しておらず、とにかく西へ避難した。

田村市の春山小学校で、職員2人で500人以上の避難者の対応をしたが、最初は情報が錯綜し、大熊町はどうなっているのか、自分達はこれからどうすればいいのかなど、住民は殺気立つ状況でまとまらなかった。



そこで、班を編成し、班員の意見を班長がまとめ、その意見に対して、出来る事と出来ない事を丁寧に説明するなど、職員が責任をもって対応し、トラブルはなくなっていった。

また、女性専用の部屋を作ったり、小学生に勉強を教えたりなど、当たり前前の生活をさせるよう心がけた。

「どのような状況下においても、自分で考えて行動し、しっかり責任を持つ事が大切である。」

(2) 仕事をする上で大切な事とは

- ・同じ職場内で仲間とたくさん作る事、そして、協力し合う事が大事。
- ・病気になる職員が増えているが、とにかく寄り添ってあげる事が大事。傍観者にならず、しっかり見てあげれば、自分に自信がつき、病気も少しずつ良くなっていく。
- ・公務員とは、どんな状況であっても住民を守らなくてはならない責任がある。
- ・労働者を守るということは、一人の仲間を守る・他の職場の労働者を守るということ。
- ・できないことをやれというのは、難しいこと。できないことをできるようにする、できることができるようにする支援が大切。



【参考】

◆東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う避難指示区域の動き (HP より抜粋)

- H23.3.11 21 時頃 原子力緊急事態宣言を発令 周辺 3 キロに避難要請
- H23.3.12 6 時頃 避難区域を半径 10 キロ圏内に拡大
- H23.3.12 15 時 36 分頃 福島第 1 原発 1 号機 水素爆発
- H23.3.12 19 時頃 避難区域を半径 20 キロ圏内に拡大
- H23.3.14 11 時頃 福島第 1 原発 3 号機 水素爆発

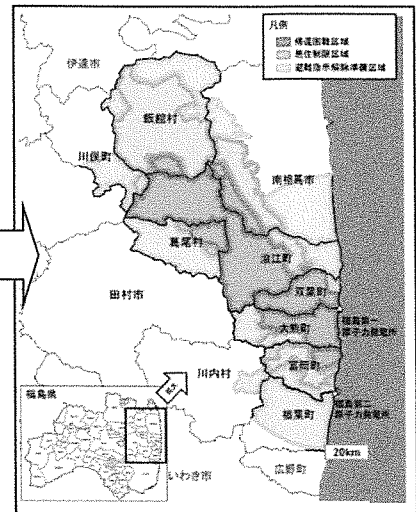
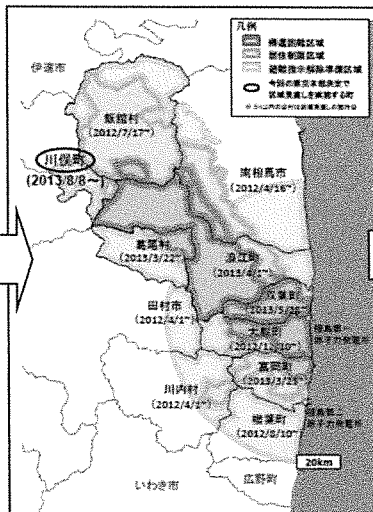
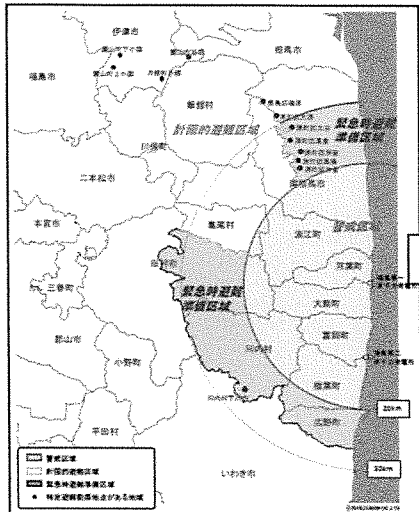


◇現在までの避難指示区域の変遷

(H23. 9. 30 時点)

(H25. 8. 7 時点)

(H26. 10. 1 時点)



【大熊町役場現地連絡事務所職員との記念撮影】



参加者の感想



中村 洋介
(青年部長)

雪が降る中で初めての帰還困難区域に入り、まず、驚いたのは残された車の数であった。以前、浪江町の避難地域を見たときは、車はなかった。今回の私がみたものは、着の身着のまま、車すら置いて緊急的に避難したということが分かる現状であった。車が置いてあると、人がいるかのように錯覚してしまうことが度々あったが、よく見れば庭は雑木林になっており建物も震災の影響で壊れたまま…人がいる気配がしない。

空間線量も高いところは7・8マイクロシーベルト以上あるところも通過したり、愛場さんのアパートでは、雨どいの排水の部分（地面に密着状態）では80マイクロシーベルトという線量計の数字を見て恐怖さえ感じた。こんな状況で「とても人が住める環境ではない」と素直に思ってしまった。

また、建物など壊れたままであり、愛場さんのアパートの中に入れていただいたが、中はねずみなどが食い荒らし、糞だらけ…。とても帰ってきて住める環境へと変えていくのは大変だなと思うことときれいにしても以前の状況があると住みたいくはないと素直に感じてしまった。

放射能の一番厄介なのは見えないこと、匂いもないこと。一見なんでもないように見える。しかし、線量計をみれば日常では考えられない数字になっている。数字にしないと分からないし、数字をみてもそれが酷いのか酷くないのか専門的な知識も必要である。そんなものを、人間は作ってしまったんだなあ…とつくづく思った。

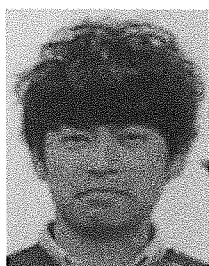
しかし、明るい情報もある。除染をした地域では空間線量は、私のいる二本松より低い数値を出している。除染をすれば、確かに線量が下がるということも分かった。ただ、全面的な除染となれば多額の費用がかかるし時間もかかる。それはどれくらいかかるのだろうか…検討もつかないが、復興に向けた大熊町は確実に一歩ずつ進んでいると感じた。

また、その復興の最前列で職員と共に活動している「通称：じじい部隊」の皆さんと話をすることができた。職員のOBからなる方々との会話は、非常に有意義であった。

当時の状況下では、指揮系統は機能しない。自分たちが今できることを最大限やってきたつもりではある。その中で重要なのは、自分たちが行動を起こすこと。また、行動するには、仲間も必要。組織化しさまざまな意見を集約し、できることはやるし、できないことは今はできないとはっきりすることと話していた。

今の現状を変えていくには、行動が必要なんだということ、そして行動するには仲間も必要だということ。そして、自分たちが今できることから少しずつでもいいから前へ進むということ学びました。

学習会を通じて、大熊の悲惨な現状、また原発の危険性、でもそこで働く労働者もいるということ。どのようにしていったら良いのか…自分だけではわからないが、仲間と一緒に考えたいと思う。そして、大熊町が一日でも早く、元に戻れるよう心から応援したいと思った学習会でした。



佐々木 佑
(青年部副部長)

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原発事故から3年10か月が経過する大熊町へ視察に行くことになり、最初に思ったことは「大熊町の現状をよく知らない」ということでした。

同じ原発事故の放射能被害者である私が、福島現状を知らないというのは、県外で暮らしている人たちと同じレベルであり、自分の中で原発事故が風化してきているという一種の焦りというか、情けなさを感じました。

有志の仲間たちで車に乗り込み、空間線量を計測しながら大熊町へ入っていくと、今までの線量より明らかに高い数値が表示されたことに驚きました。

「いまだにこんなに高い線量なのか」という気持ちで、スクリーニング会場に入り、タイベックスーツに身を包んだ。帰還困難区域へ入ると、民家の入り口にはバリケードがあり、誰もいないはずの町中には車が何台も止っており、誰かが住んでいるのではないかと錯覚する異様な光景が広がっていました。海岸も瓦礫が散乱し、全く復興が進んでいない現状を目の当たりにしました。

今回の視察で、こういった福島の現状を理解し、福島内外の仲間と共有しながら大熊町を初めとした福島県の復興をみんなで進めていくことが重要であると改めて感じました。



佐藤 貴史
(青年部事務局次長)

津波によって壊されたままの水産試験場や堤防や、人がいない街中、スクリーニング会場で積算線量計の携帯を指示されたりと多くのことに衝撃を受けました。

震災・原発事故は、3年10か月経過し、私の市は、除染が進み、一時避難をしていた家族も徐々に戻ってきており、震災前に徐々に戻ってきている状況であるのにも関わらず、大熊町では被害の様子がいまだ色濃く残っていました。「帰りたくても帰れない」、震災前の生活に戻ることが出来ない現状があり、憤りも感じました。原発は、人にやさしい安全なものではなかったのか、こんな状況を生み出しておきながらなぜ日本は、原発の再稼働を進めているかと疑問に思います。こんな状況は、許せません。

連絡事務所にて横山さんより、当時の対応の様子を聞くことができ、大変混乱した状況をうかがうことが出来ましたが、その中で私たち公務員という仕事について「公務員は、住民を守らなくてはならない。私たちがいなくなったら、誰が守るんだ。」とお話されました。その言葉に、恥ずかしながらはっとしました。私たちの仕事は、住民がよりよい生活できるようにするものであって、どんな状況でも住民を一番に考えて行動しなければならない。どのようにしたら仕事が進むか、効率がいかと自分達目線で仕事をしていしまっていたところがありました。

今回の大熊町視察・現地学習会では、大熊町、原発事故、現地連絡会の皆さんの努力など多くのことを学ぶことができました。メディアでは、現在福島第一原発、大熊町についてあまり報道されることはありません。このままでは、風化してしまう可能性があります。大熊町の現状・連絡事務所の皆さんの活動を広く呼び掛けていかなければならないと思いました。



加藤 和明
(青年部常任委員)

大熊町の実状は、道路のいたる所にゲートが張り巡らされ、進入が制限されている状態であり、沿岸部は津波による被害があったままの状態、そして住宅地は家と車が家主を待っているかのようにただひたすら建ち尽くしている状態であり、事故後3年10ヶ月が経過した今でも時間がストップしている状況でした。空間線量は帰宅困難区域に入ったところ、あっと言う間に $3\mu\text{Sv/h}$ を超え、高いところでは $10\mu\text{Sv/h}$ を超える所もあり、放射能の汚染状況の深刻さを感じないではいられず、自分が考えていたよりも厳しい状況である事に気づかされました。

しかし、そのような状況でも、面的除染を実施したところの空間線量を測定すると $0.2\mu\text{Sv/h}$ 前後であり、除染の大切さ、そして少しずつでも復興に向かって進んでいる事を感じ取れました。

さらに、現地連絡事務所の方々「通称：じじい部隊」が、毎日大熊町の見守り・維持管理をされていると聞き、そして横山さんの大熊町復興に対する熱い想いを直接聞くことで、大熊町はこんなにも頑張っていて復興に向けて進み始めている事に気づかされ、強く感銘を受けました。

横山さんは、仲間を作ることそして協力し合うことの大切さを教えてくれました。じじい部隊3名の方々は元々同じ職場の仲間だったそうです。実際に仲間と共通する目的を持って協力し合い、こんなにも苦しい状況に立ち向かう姿を自分の目で見る事ができたのは、自分にとってとても貴重な財産になりました。

私は、大熊町がこの未曾有の大災害から復興を成し遂げる町になると信じています。



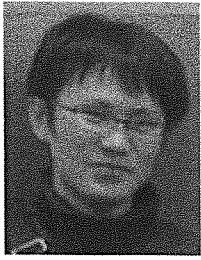
平林 雄太
(青年部常任委員)

同じ県内にありながら、今まで実情を知る機会が非常に少なかった大熊町の詳細を直に見ることに意味があり、大変重要なものであった。大熊町の現状は4年近く前に見た被災後の浜通りのまま時間が止まったようで、被災直後の記憶を呼び起こさせた。

これまで、報道で知ることが出来たのは原発や処分場の話だけで、町民の方々の生の声というのは一部ドキュメンタリーや週刊誌を除いて、ニュースでは殆ど聞こえてこないため、どこか現実味に乏しいと感じていた。しかし、横山さんや加井さんから聞かせていただいたことで震災当時から今までの出来事が鮮明なものになった。

前述の横山さんからのおはなしにもあるように、想定に無い災害と原発事故に迅速に対応されたことも驚嘆するばかりだが、その後いち早く大熊町に戻り、町民が帰る古里をたった6人で維持・管理されていることはさすがとしか言い表せない。話の中で、本意では決してない処分場の設置に協力しているにも関わらず、政府が現場の意見を無視するような計画を推し進めようとしていること、震災当時に善意の医者への要請を医師法に抵触するとの理由で県が許可しなかったこと等も衝撃だったが、それらに対して町民第一で独自の判断で活動し続けていることに感動を覚えた。横山さんが「まず動かなくちゃダメ」と言われたことと、小さく「その時の判断が正しいかは今でも分からない」と言ったことは特に印象に残った。

大熊町が、そして福島県が風化してしまわないように、原発の現状を残し伝えるため、さらに復興のためにも意識を持って出来ることをしていきたいと思う。

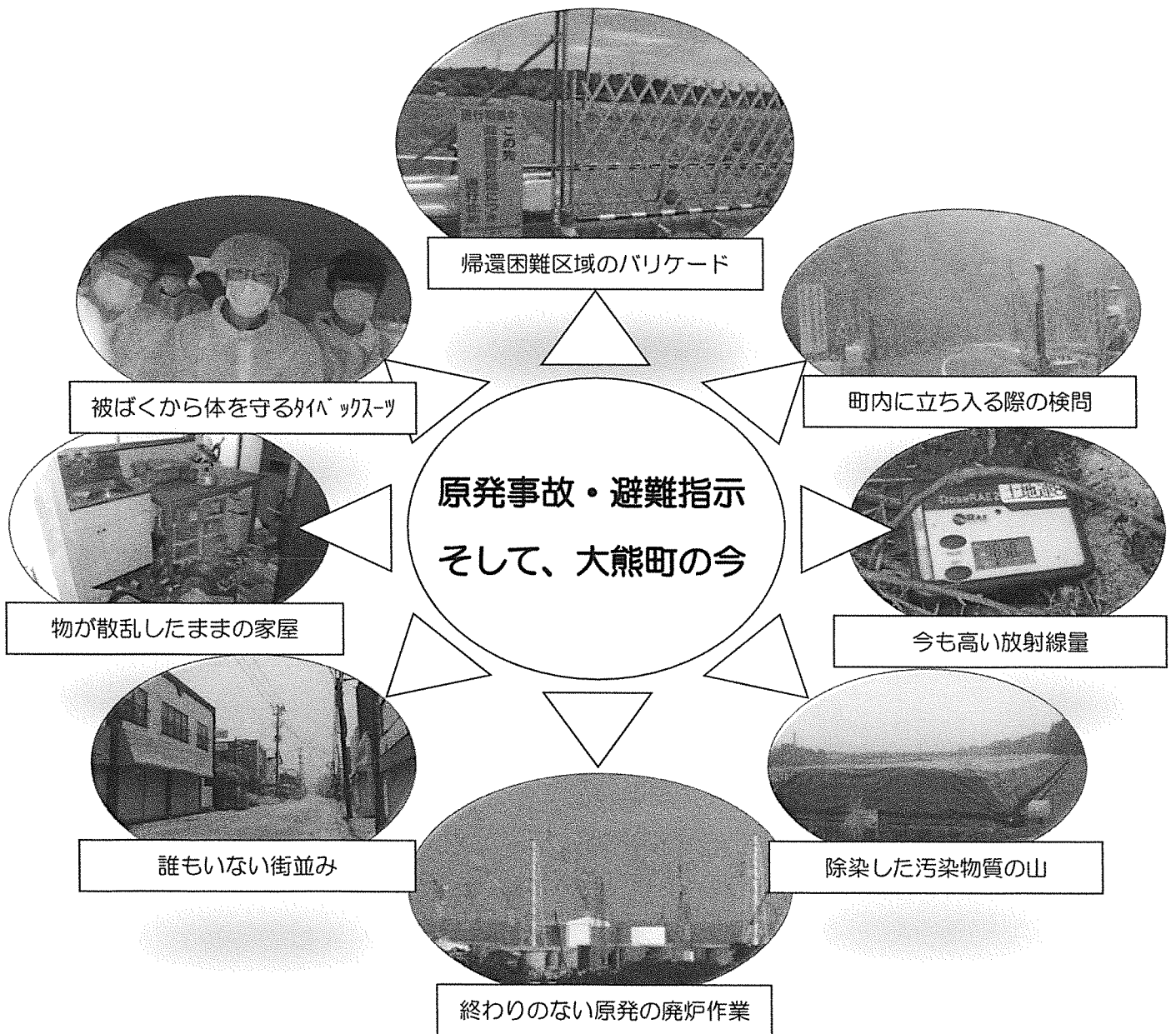


二階堂 晃平
(前青年部事務局次長)

1年半前に浜総支部青年部のオルグに参加させていただいて以来の浜通りの視察をさせていただきました。

報道で、現状を理解しているつもりでしたが、実態は全く別物だというのが一番の印象でした。また、大野駅の前に掲げられていた看板には、『地球にやさしいエネルギー原子力』という標語が書かれていて、これは神話に過ぎなかったのかと非常に怒りを覚えました。

これからは、この視察を糧として原子力について今まで以上に考えなければならぬと強く思いました。



大熊町の復興に向けて ～復興ビジョンより抜粋～

Ⅲ 中長期的な大熊町土の復興・再生に関する町としての考え方
 Ⅲ-2 町土復興・再生の第一ステップとしての大川原復興拠点整備

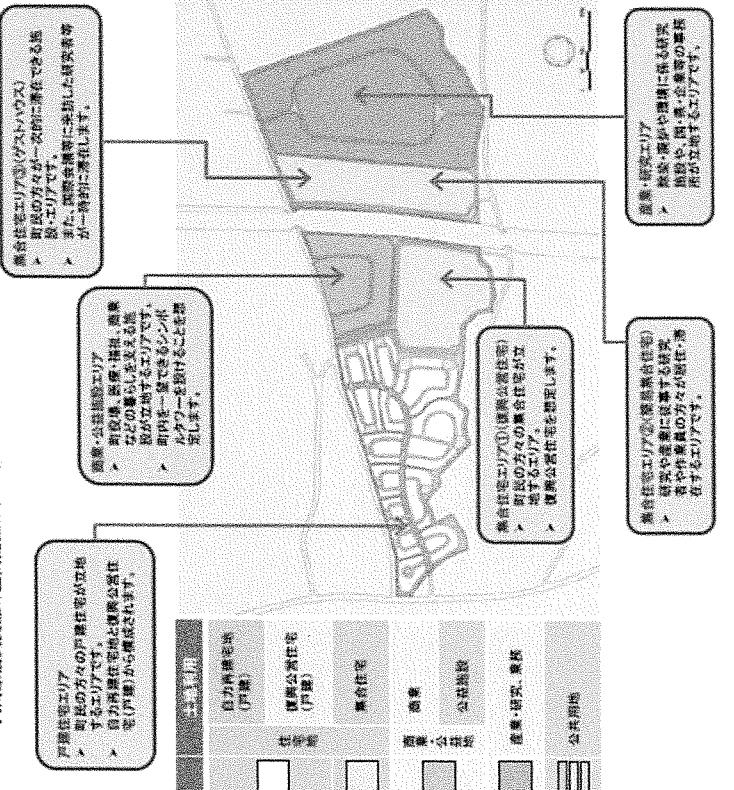
4. 復興拠点における空間整備イメージ

- ◆ 大熊町の南端に位置する約39haのエリアを想定。諸機能が集約したコンパクトな市街地とします。
- ◆ 大川原復興拠点の居住人口規模は、約3,000人程度を想定します。
 - ▶ 増進される町民の方々：約1,000人（最大1,500人程度）
 - ▶ 町外からの住民の方々：約2,000人（研究者や施設従事者等）

空間配置方針

- ・比較的低層量の西地区に町民の暮らす住宅エリアを配置。東地区に産業・研究エリアを配置。
- ・町民の暮らす住宅エリアは「戸建エリア」、「集合住宅エリア」によって構成。西エリアを近接させ、町民相互の交流を育む。
- ・まちの中央で、町民の暮らす住宅エリアに近接する場所に、商業・公益施設エリアを配置。
- ・商業・公益施設エリアには、町民の暮らしを支える町役場、シンボルタワー（医療施設、商業施設、コンベンション施設等）、警察機関、消防署等を設置。

大川原復興拠点の空間配置イメージ



エリア利用	大川原復興拠点を構成する施設・機能のイメージ
住等場	<ul style="list-style-type: none"> 自力再建住宅(戸建) 復興公営住宅(戸建) 集合住宅
商業・公益地	<ul style="list-style-type: none"> ① 復興商業施設 (町民の方々) ② 復興商業施設 (町民の方々) ③ アパートハウス (町民の一次的な滞在や、国内からの研究者等の滞在) ④ コンビニエンスストア、スーパーマーケット、薬、美容室、薬局、ガソリンスタンド等 ⑤ 金融機関 ⑥ スポーツ施設・入浴施設 等
産業・研究・業務	<ul style="list-style-type: none"> ⑦ 町役場 ⑧ シンボルタワー<く医療施設、商業施設、コンベンション施設等> ⑨ 警察機関、消防署 等 ⑩ 防犯や通信、環境、ロボット技術等に係る研究施設
公共用地	<ul style="list-style-type: none"> ⑪ 道路、公園、緑地、市民情報館、調整池 等
その他 (周辺地区に整備)	<ul style="list-style-type: none"> ⑫ 農圃 ⑬ 介護老人保健施設 ⑭ ソーラー発電システム(農地の蓄定活用及び管理) 等

大川原復興拠点の整備イメージ

